

論文タイトル： Epidemiological study on relationship between breast cancer mortality and dietary factors.

論文著者： Ishimoto H, 他

論文掲載誌： Tokushima Journal of Experimental Medicine. 41: 103-114.

---

この研究は、1966年から1980年に実施された国民栄養調査のデータと、1976年から1990年の乳がんの年齢調整死亡率のデータが用いて、全国12地域（北海道、東北、関東1、関東2、北陸、東海、近畿1、近畿2、中国、四国、北九州、南九州）の、食品および栄養摂取と日本人女性の乳がんによる年齢調整死亡率との関連を検討しています。

1966年～1990年の12地域の乳がんによる年齢調整死亡率は、すべての地域において、増加傾向がみられましたが、地域別では、関東1（埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県）が最も高く、次いで近畿1（京都府、大阪府、兵庫県）、北海道、近畿2（奈良県、和歌山県、滋賀県）、一方で、最も低いのは南九州（熊本県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県）、次いで四国、中国、北陸となりました。

12地域における、小麦、油脂、肉、乳製品、総脂質、動物性脂質、飽和脂肪酸の摂取量は、乳がんの死亡率の高い、関東1、関東2、近畿1においてもっとも高く、逆に死亡率の低い南九州、四国、北陸では摂取量が少ない結果となり、特に動物性食品の摂取量と、乳がんの死亡率の関連が示唆されました。動物性食品の摂取量と死亡率の12地域における相関を解析した結果、関東1ではどちらも高く、逆に南九州はどちらも低い結果となり、これらの相関は極めて強いことが示唆されます。

また、動物性脂質は飽和脂肪酸の1つですが、さらなる解析により、動物性脂質としてよりも、飽和脂肪酸としての方が、乳がん死亡率の相関がより強いことが示されました。

※詳細は、文献をご確認ください。

—国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所—